

うち しろ
内城第1遺跡

— 宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



—— 2001.3 ——

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

序

この報告書は、宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴い、平成11年度に佐土原町教育委員会が主体となり調査した内城第1遺跡発掘調査の記録です。

佐土原町では、開発事業が計画される地域の埋蔵文化財発掘調査を事前にを行い、先人の残した遺跡や道具など文化財の調査・保護と啓発に努めています。

今回の発掘調査地は、中世期の山城の一つである内城の東端に張り出した曲輪部分であり、町内に点在する中世期の山城を解明するうえで重要な遺跡であるととらえています。

また、縄文時代から人々が生活をしていた痕跡も確認されており、佐土原において古代から人々が生活をしていたことを示す貴重な情報も得ることができました。

この発掘調査の記録が、今後の佐土原の歴史を紐解くための研究・考察の基礎となり、文化財への理解と認識をさらに深め、教育・研究の現場等で幅広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、関係各位より頂いたご指導・ご協力に対し心よりお礼を申し上げます。

平成13年3月

佐土原町教育委員会
教育長 菊池俊彦

例　　言

1. 本書は、宮崎地区・北伊倉携帯電話無線基地局建設事業に伴う「内城第1遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州の依頼を受け、佐土原町教育委員会が主体となり、平成11年度に社会教育課文化財係が行った。
3. 発掘調査は平成11年4月16日から5月31日まで行った。
4. 本書に使用した写真は、木村が撮影し、空中写真測量は、朝日航洋株式会社が行った。
5. 本書で使用した位置図などは、国土地理院発行の縮尺2万5千分の1地形図を基に作成した。
6. 出土遺物は、佐土原町教育委員会（佐土原町出土文化財管理センター）で保管している。
7. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」による。
8. 方位は磁北、レベルは海拔高である。
9. 遺構の略号は以下の通りである。

P=柱穴 S E=溝状遺構 S I=集石遺構 S X=性格不明土坑

10. 地形・地質については、穴戸地質研究所穴戸 章所長の指導を受けた。
11. 本書の執筆・編集は、木村主査が担当した。

※本調査と平行して県埋蔵文化財センターが行った分布調査との整合を考慮しながら考察した。

目 次

(本 文 目 次)

第1章 はじめに	8
第1節 調査に至る経緯	8
第2節 調査の組織	8
第3節 遺跡の位置と環境	9
第2章 内城第1遺跡の調査	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構	13
第4節 遺物	17
第3章 まとめ	24

(捷 図 目 次)

第1図 内城第1遺跡の位置と周辺の遺跡	10
第2図 内城第1遺跡の調査範囲と周辺地形図	11
第3図 内城第1遺跡基本土層図	12
第4図 内城縄張図	14
第5図 内城第1遺跡等高線図	15
第6図 内城第1遺跡遺構分布図	16
第7図 内城第1遺跡遺物分布図	19
第8図 内城第1遺跡出土遺物実測図(1)	20
第9図 内城第1遺跡出土遺物実測図(2)	21

(表 目 次)

第1表 内城第1遺跡出土遺物観察表(1)	22
第2表 内城第1遺跡出土遺物観察表(2)	23

(図 版 目 次)

図版 1 内城第1遺跡全景	1
図版 2 内城第1遺跡真上	2
図版 3 内城第1遺跡遺構(1)	3
図版 4 内城第1遺跡遺構(2)	4
図版 5 内城第1遺跡作業風景	5
図版 6 内城第1遺跡出土遺物(1)	6
図版 7 内城第1遺跡出土遺物(2)	7

図版1



内城第1遺跡全景

4
+



内城第1遺跡真上

図版3



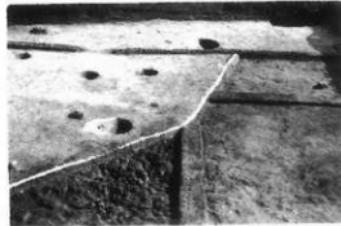
調査前近景



調査前遠景



性格不明土坑



検出状況(北側から)



検出状況(東側から)



検出状況(西側から)



性格不明土坑



内城第1遺跡遺構 (1)

図版4



検出状況(東側から)



性格不明土坑



性格不明土坑



性格不明土坑内出土遺物



検出状況(北側から)



柱穴



北東隔壁面トレンチ



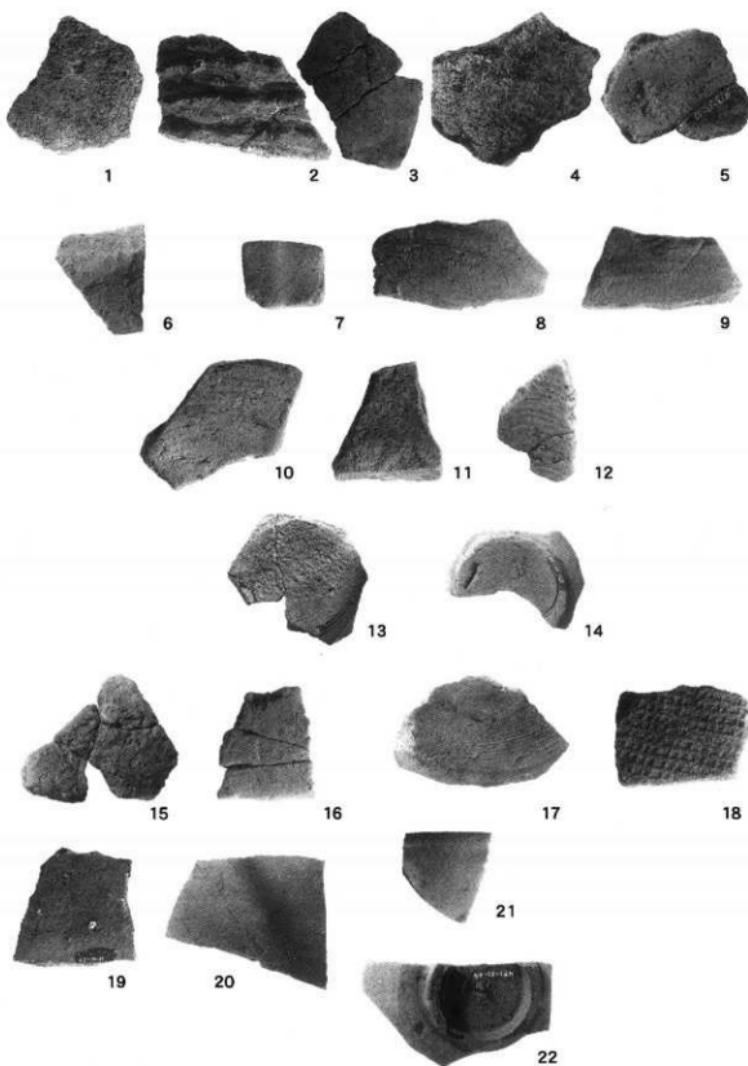
性格不明土坑

図版5



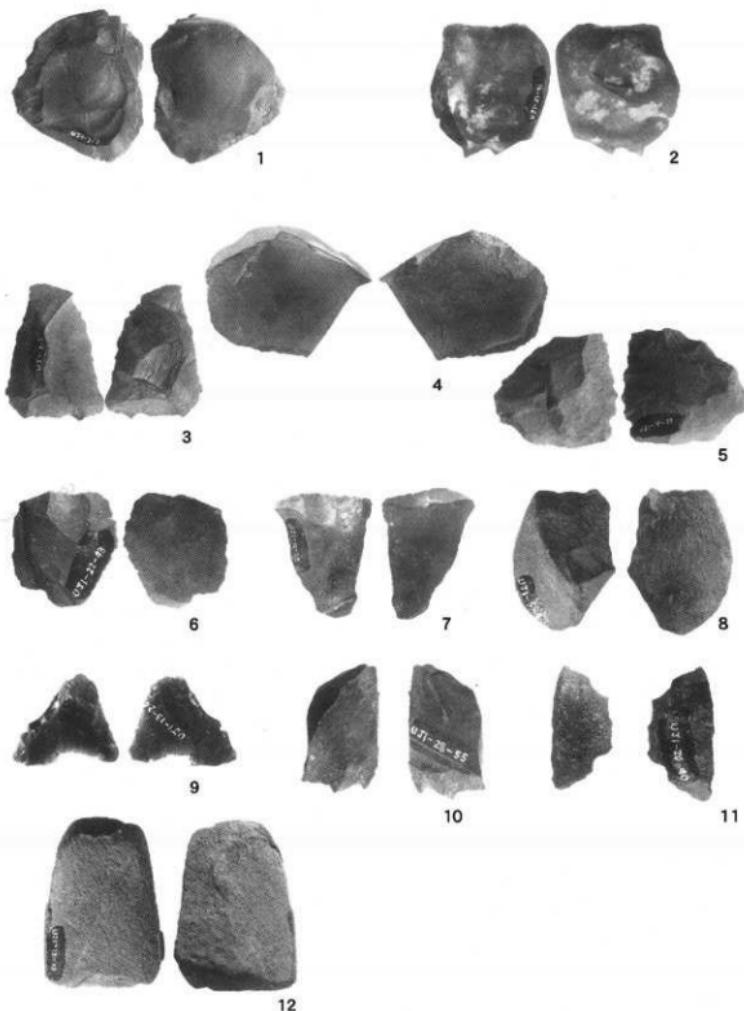
内城第1遺跡作業風景

図版6



内城第1遺跡出土遺物（1）

図版7



内城第1遺跡出土遺物（2）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今日の情報通信は、防災活動・産業経済活動・住民の生活上において、欠かすことのできない重要なものとなっている。なかでも、携帯電話やPHSなどの移動体通信は、近年の急速な普及率に比べ、その利用範囲は未だ未整備の部分が多く、すべての地域においてその恩恵を享受できない状況のようである。

こうした課題を解決するため、近年、無線基地局の増設が各地で行われている。

こうした状況の中、携帯電話無線基地局建設予定地として挙げられた地点が佐土原町内文化財包蔵地「内城第1遺跡（5004）」にあたるため、町教育委員会と株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州との協議を行い、確認調査を行うこととなった。確認調査は、開発予定地のうち約460m²について実施した。確認調査は、4本のトレンチを設定して行われたが、その結果、柱穴の検出や遺物の出土を確認することができた。株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州との協議の結果、遺跡の保存は困難であることから佐土原町教育委員会を主体として、記録保存を目的とする発掘調査（調査面積572.84m²）を実施することとなった。

調査対象地は畠地で、調査期間は平成11年4月16日から同年5月31日までである。

第2節 調査の組織

平成11年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教 育 長	菊池 俊彦
		社会教育課長	郡司 利文
		同課長補佐	河越 弘明（7月から）
庶 務 担 当		文化財係長	東 浩一郎
"		主 査	黒木 直英
調 査 担 当		主 査	木村 明史
"		主 事	柳間 史朗
佐土原城跡歴史資料館	館 長		赤木 達也
出土遺物整理員			（12月まで）
			（2月から）
			（1月～3月まで）

平成12年度

調査主体	佐土原町教育委員会	教 育 長	菊池 俊彦
		社会教育課長	郡司 利文
		同課長補佐	河越 弘明
庶 務 担 当		文化財係長	東 浩一郎
"		主 査	黒木 直英
調 査 担 当		主 査	木村 明史
"		主 事	柳間 史朗
佐土原城跡歴史資料館	館 長		赤木 達也
出土遺物整理員			（8月まで）
			（10月から）

第3節 遺跡の位置と環境

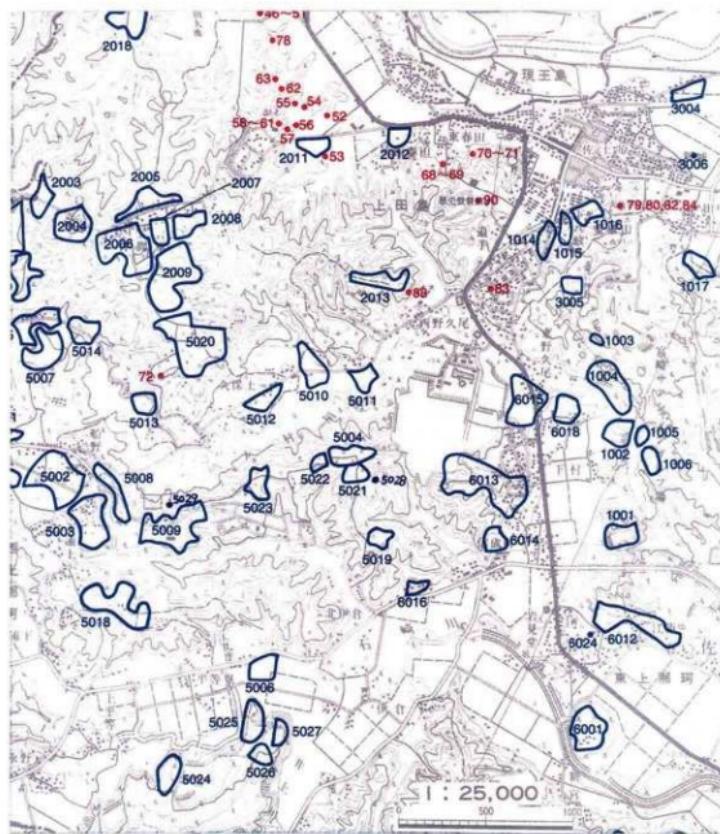
まず、地理的環境として、内城第1遺跡（5004）の所在する佐土原町は、宮崎県海岸沿いのほぼ中央に位置する。東側を日向灘に面し、北側を新富町、西側を西都市・国富町、南側を宮崎市に接しており、町域面積の大半を山地が占めている。地形はその特徴から、都於郡・仲間原台地、船野台地、年居台地と鹿野田・上田島丘陵、佐土原丘陵と一つ瀬川低地、広瀬海岸低地、那珂低地に区分することができる。東部海岸沿いには、平野が南北に広がっていて、町の北側には一つ瀬川、中央部は石崎川が流れ、石崎川水系である井上川・亀田川・下村川・新宮川が支流として山地をねっている。町域内には、巨田の大池・高峯池・上の池・追越池・山倉池・鶴府池・今坂池・刈井田池・宮ヶ迫池・成枝池など灌漑用の溜め池が多数存在している。

内城第1遺跡（5004）は、石崎川河口から西に約8km入った標高約85mの山頂に広がる遺跡であり、北側麓には石崎川水系の下村川が流れる。

次に、歴史的環境として、台地の遺跡は主に先史時代の遺跡で占められている。時代は、旧石器時代前期から縄文時代の間である。特に船野台地では、旧石器時代後期に相当する船野遺跡から細石器文化を代表する船野型石核が出土している。また、下屋敷遺跡（5001・50016）では、旧石器時代後期の砾群遺構が33基以上検出され、遺物はナイフ型石器・剥片尖頭器・スクレイパー・石核・敲石・磨石などが出土している。また、縄文早期の遺構も集石が3基検出され、遺物が打製石器・局部磨製石斧・剥片・押型文土器・無文土器などが出土している。都於郡・仲間原台地の中央に位置する山内遺跡（2010）・桜原遺跡（2016）・西ヶ迫遺跡（2002）では、縄文時代早期の炉穴などが65基以上検出されているが、これは九州内においても異例の多さである。出土遺物は、貝殻円筒土器・無文土器などである。

次に、丘陵地帯は、入戸火碎流堆積物により大半が築かれており縄文時代後期以降の遺跡が残っている。佐土原丘陵北西部では、隠山遺跡（1003）（平成4年8月～12月発掘調査）が確認されており、遺構は縄文草創期の集石遺構、中世期から近世期にかけての寺院跡が検出されている。遺物としては、縄文草創期から弥生期にかけての土器、中世期から近世期にかけての陶磁器、瓦當などである。古城第1遺跡（1007）（平成5年1月～2月発掘調査）では、中世期の城館跡の遺構が検出されている。遺物は、陶磁器が数点出土した。佐土原丘陵西部には、大光寺・高月院・崇称寺・吉祥寺・松巖寺・誓念寺・多楽院などの中世期からの寺院が多数残っている。同じく西部において平成3年度より発掘調査が行われ、下村窯跡群が確認された。この窯跡からは、日向國分寺や日向國府推定地である寺崎遺跡（西都市大字右松字寺崎）出土の瓦と同系統のものが出土しており、これらの遺跡との関係が推測される。佐土原丘陵中央部から南部にかけては、古墳時代の横穴墓である広瀬村古墳群（1～22）が数多く残っている。鹿野田・上田島丘陵にも古墳時代の横穴墓である佐土原町古墳群（43～78）が多数ある。

最後に低地においては、広瀬海岸低地の伊賀給遺跡（1022）が平成9年6月からの発掘調査で弥生時代後期から中世にかけての水田跡であると確認された。特に、弥生時代後期の水田跡は小区画53枚が検出されている。遺物としては、木材（推定年代3.500年前）・弥生土器・土師器などが出土している。



1001	叶追遺跡	1002	山田第1遺跡	1003	越山遺跡	1004	坂ノ下遺跡
1005	山田第2遺跡	1006	山田第3遺跡	1014	後田第1遺跡	1015	後田第2遺跡
1016	後田第3遺跡	1017	宮ヶ追遺跡	2003	杉尾遺跡	2004	五月田遺跡
2005	永尾遺跡	2006	長谷遺跡	2007	仲間原遺跡	2008	今僧津遺跡
2009	大原遺跡	2011	鶴府遺跡	2012	岩崎遺跡	2013	野久尾遺跡
2018	曲田遺跡	3004	祝烟遺跡	3005	茶屋窯跡	5002	古園遺跡
5003	野地遺跡	5004	内城第1遺跡	5006	上鳥巣遺跡	5007	小永迫遺跡
5018	南学原第1遺跡	5009	南学原第2遺跡	5010	境畑遺跡	5011	尾曲遺跡
5012	松本遺跡	5013	横山遺跡	5014	永谷遺跡	5018	松山遺跡
5019	内城第2遺跡	5020	佐野原遺跡	5021	内城第3遺跡	5022	内城第4遺跡
5023	中原遺跡	5024	森園遺跡	5025	学頭第1遺跡	5026	学頭第2遺跡
5027	宮の前遺跡	6001	中島遺跡	6012	福城寺遺跡	6013	松月天下第1遺跡
6014	松月下第2遺跡	6015	新馬場遺跡	6016	伏原遺跡	6018	西村第2遺跡

● 県指定古墳

第1図 内城第1遺跡の位置と周辺の遺跡

第2図 内城第1遺跡の調査範囲と周辺地形図



第2章 内城第1遺跡の調査

第1節 調査の概要

内城第1遺跡は、内城と呼ばれる城郭の曲輪の一画を占める。内城は、佐土原城の南約1kmの地点に緩やかな平坦面が広がる台地上（標高8.5m前後）に展開する。発掘調査地の所在する曲輪I（第4図）は、城郭全城を俯瞰すると台地上から尾根が放射状に張り出す蜻足状の景観のほぼ中心に位置する。曲輪の機能は、東西南の各方面を堀切で、北側を急斜面によって防禦され各曲輪の中で最も要害な箇所を占め主郭の役割を果たしている。

今回の調査地は、主郭曲輪の機能を有する曲輪Iの東側先端に位置し、東側隣は堀を挟んで曲輪IVが並んでいる。調査地の現況は畠地で、調査は重機により約30cmの深さで耕作土を除去後、遺構を検出した。遺構検出面からは、柱穴29・性格不明土坑11・集石遺構2・溝状遺構1を確認した。また遺物は、縄文土器2・弥生土器3・土師質土器12・須恵器1・陶器4・剥片7・尖頭状石器2・円形搔器1・石鎌1・石斧1の計34点が出土した。

第2節 基本層序（第3図）

調査地及び周辺は、新田原段丘面に位置し、通常アカホヤ火山灰（約6,500年前の降下火山灰。以下AH）、小林軽石（約16,000年前の降下火山灰。以下Kb）、姶良丹沢火山灰（約25,000年前の降下火山灰。以下AT）、アワオコシ（約4万年前の降下火山灰。以下AW）、イワオコシ（約4万年前の降下火山灰。以下IW）、第3オレンジ（約5万年前の降下火山灰。以下Or3）、阿蘇4火碎流堆積（約8万年前の降下火山灰。以下ASo4）の7つのテフラの堆積が確認できる。

調査の層序は、1層から7層に分層した。この中で埋蔵文化財の出土層は、4~6層で、約6,500年~500年前に堆積した層である。時代区分は、縄文時代~中世後半（室町期）に相当する。遺構・遺物出土層は、5層で中世城郭の施設跡が検出された。



第3図 内城第1遺跡基本土層図

S = 1 : 40

第3節 遺構

内城第1遺跡は、5層の生活基盤層から柱穴29・性格不明土坑11・集石2・溝状の遺構1が出土した。

柱穴（第6図）

調査地区的北側・中央・西側にまとまって柱穴が検出された。総計29穴で大きさは、直径約40cm~80cm・深さ約20cm~30cmを測る。柱穴内に入っている埋土【砂壌土：黒褐色（16穴）、粘土：茶褐色（13穴）】から2時期にかけて使用していたと推測できる。時期は、柱穴埋土から出土した遺物によって中世期に普請し営まれたと思われる。

性格不明土坑（第6図）

調査地区的中心部と南北の調査区設定の壁面に沿って性格不明土坑が広がる。総計11で大きさは、北側壁面側SX1：東西約1m50cm・南北約3m、SX2：東西約1m20cm・南北約2m20cm、SX3：東西約2m・南北約3m、SX4：東西約11m・南北約7m、SX5：東西約7m・南北約6m、SX6：東西約1m50cm・南北約30cm、SX7：東西約40cm・南北約2m70cm、SX8：東西約1m80cm・南北約1m50cm、SX9：東西約2m・南北約1m、SX10：東西約50cm・南北約1m50cm、SX11：東西約2m50cm・南北約50cmを測り、深さは約25cm~30cmである。形は、不定形で中世期城郭を築く際に何らかを普請し、廃城後に土層観察から自然堆積していたと思われる。

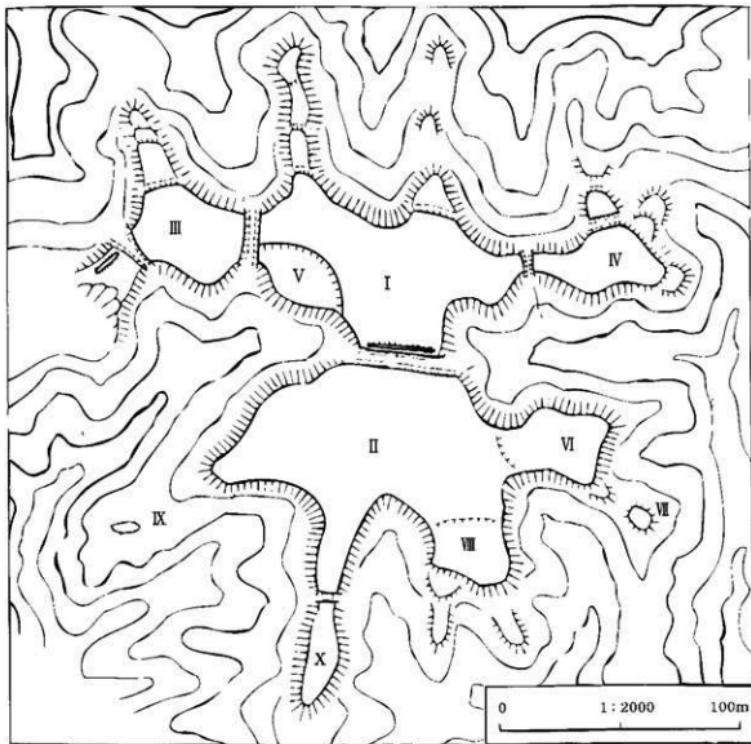
集石遺構（第6図）

調査地区的西南隅と東南隅に東西方向に沿って集石が走っている。集石遺構は総計2で大きさは、西南隅SI1：幅約30cmで東西方向に約11m、東南隅SI2：幅50cmで東西方向に約5m50cm走る。SI2は、溝状遺構の両肩上面に造られていることから溝の橋及び施設間の区分けとしての機能を果たしていたと推測される。

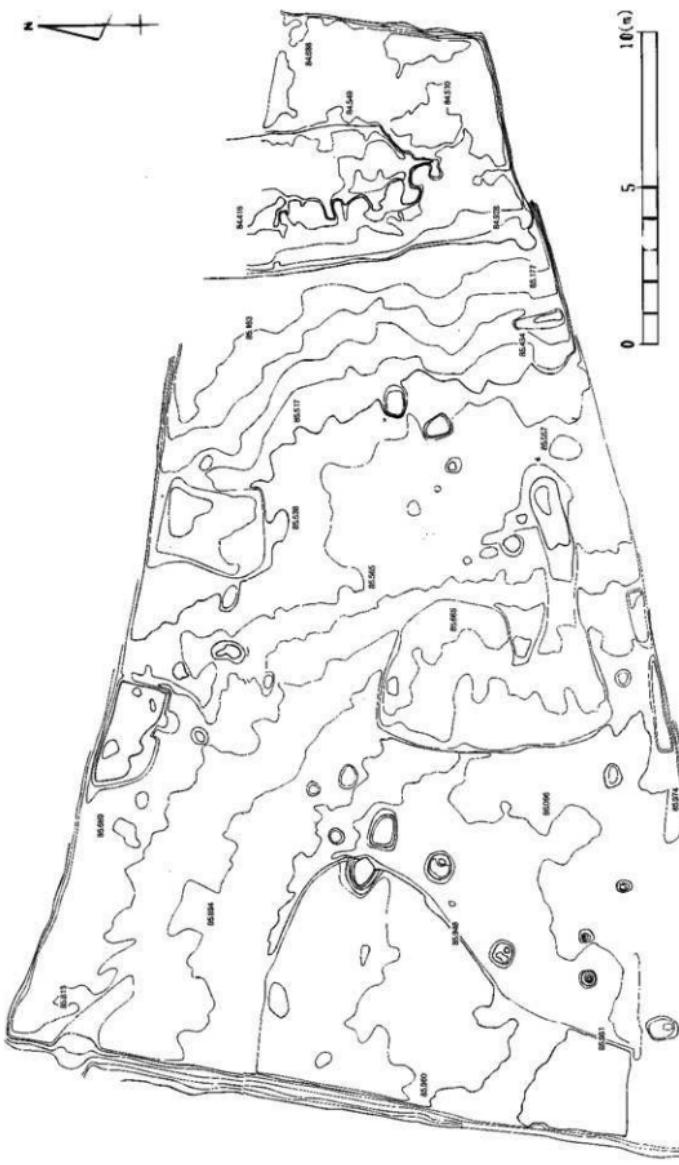
溝状遺構（第6図）

調査地区的東側隅を南北に溝状に継続する。検出数は1で大きさは、幅約3m80cmで深さは約80cmである。機能は、溝の幅・深さ・繩張り上北側に堀が設けられている点から曲輪内の施設の区分けに設けられていたのではないか。

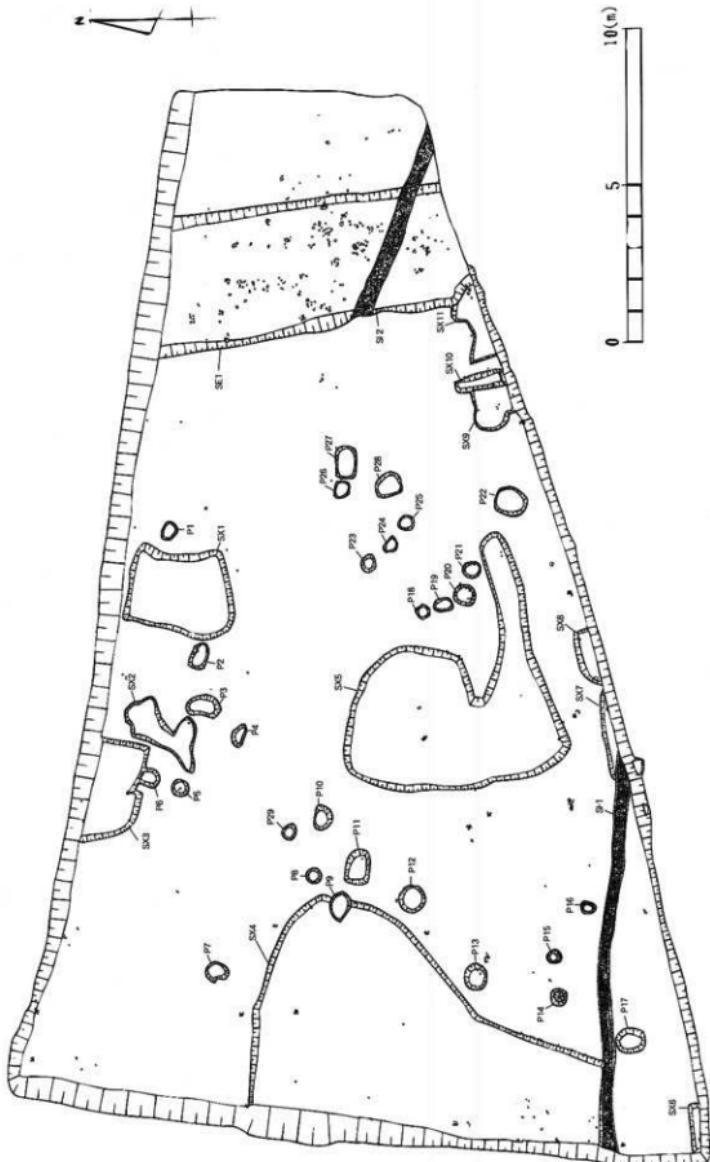
4
+



第4図 内城縄張図
（吉本正典・福田泰典原図作成）
※『宮崎県中近世城跡跡緊急分布調査報告書II』
1999.3 宮崎県教育委員会発行 一部加筆



第5圖 內城第1遺跡等高線圖



第6図 内城第1遺跡遺構分布図

第4節 遺物

縄文時代～中世期時代の土器・陶器（第8図）

1は縄文時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は全体的に風化しているが横・斜目方向の工具痕があり、内面は指による横方向のナデ・工具による斜方向のナデが確認できる。

2は縄文時代の深鉢である。胴部の一部で、器面調整は、外面は斜方向のナデ・貼付突帯があり、内面は横方向の貝殻条痕が施されている。

3は弥生時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横斜方向の刷毛目、やや斜め方向のヘラ磨き、内面は横斜方向のヘラ磨きが施されている。

4は弥生時代の鉢である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横斜方向の工具痕があり、内面は横斜方向の工具痕が施されている。

5は弥生時代の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は横方向の工具痕があり、内面は、斜方向のナデが施されている。

6は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。口縁部から底部の一部で、器面調整は、外面の胴部は、横斜方向のナデ、底部はヘラ切り、内面は横方向のナデが施される。

7は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。口縁部の一部で、器面調整は、内外面ともナデが施されている。

8は中世期の土師質土器の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は工具による横方向のナデと指頭による横ナデ、内面は指頭による横ナデが施されている。

9は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。胴部の一部で、器面調整は、外面は工具による横方向のナデ、内面はナデが施されている。

10は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はヘラ切り、内面はナデが施されている。

11は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、内外面とも摩滅している。

12は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はナデ、内面は摩滅、底部は糸切り痕が残っている。

13は中世期の土師質土器の皿（かわらけ）である。底部の一部で、器面調整は、外面はヘラ削り・ヘラ切り、内面はヘラ削りが施されている。

14は中世期の土師質土器の壺である。底部の一部で、器面調整は、外面はナデ・ヘラ切り、内面は風化している。

15は中世期の土師質土器の壺である。頸部から胴部の一部で、器面調整は、外面は風化し内面はナデが施されている。

16は中世期の土師質土器の壺である。口縁部から胴部の一部で、器面調整は、外面はナデ、内面は横方向のナデが施されている。

17は中世期の土師質土器の皿である。底部の一部で、器面調整は、外面は斜方向の工具痕・ヘラ切り、内面は横方向のナデが施されている。

18は中世期の須恵器の壺である。胴部の一部で、器面調整は、外面は格子状の工具痕と黒変あり、内面は粘土の繋ぎ目があり、ナデ?が施されている。

19は中世期の陶器の甕である。胴部の一部で、器面調整は、内外面とも横方向のナデが施されている。

20は中世期の陶器の甕である。胴部の一部で、器面調整は、内外面とも横・斜方向の刷毛目が施されている。

21は中世期の陶器の塊である。口縁部の一部で、器面調整は、内外面とも釉薬が掛かっている。

22は中世期の陶器の塊である。胴部から底部の一部で、器面調整は、内外面に釉薬が施され、底部にヘラ切り、釉薬が施されている。

縄文時代～弥生時代の石器（第9図）

1・2・4・6・8・10・11は縄文時代の剥片である。

1は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏の両面とも一方向からの打点で剥離が行われる。縁部は二次的に極厚形細部調整により一縁が背部整形成され、その他の縁部は刃部として使用されている。機能は搔器として用いられていたと推測される。

2は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。裏面は打面を設け剥離し、表面と打点は同一方向である。表面の一縁に二次的に細部調整が行われる。

4は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面から一縁に二次的に細部調整が行われる。

6は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。裏面に石核から剥離した際の打点が観られる。

8は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。この剥片は、石核剥離の打面を形成する際に生じたと考えられる。

10は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面とも二次的な細部調整は行われていない。

11は石核から石器を作り出す際の剥片の一部である。表裏両面とも二次的な細部調整は行われていない。

3・7は縄文時代の尖頭状石器である。

3は両縁が平行でなく、表面の稜が両縁が平行に走っていない石刃状剥片を素材にしている。裏面の一縁を細部調整している。機能は両縁が刃部で形状が尖頭状を成すことから刺突具として用いていたと思われる。

7は両縁が平行でなく、表面の稜が両縁に平行に走っていない石刃状剥片を素材にしている。基部は表裏両面から細部調整を行っている。

5は縄文時代の円形搔器である。

5は石核から作り出された剥片を素材にして全周縁に細部調整を行い刃部を形成している。機能は円形搔器として使われていたと思われる。

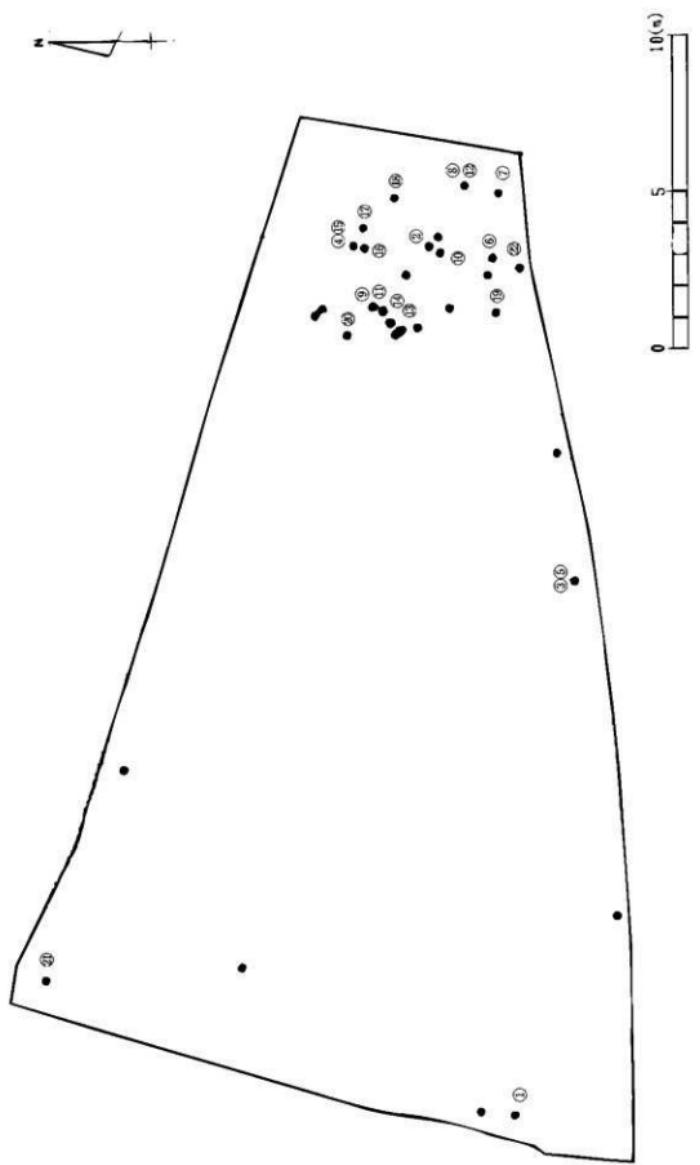
9は縄文時代の石鎌である。

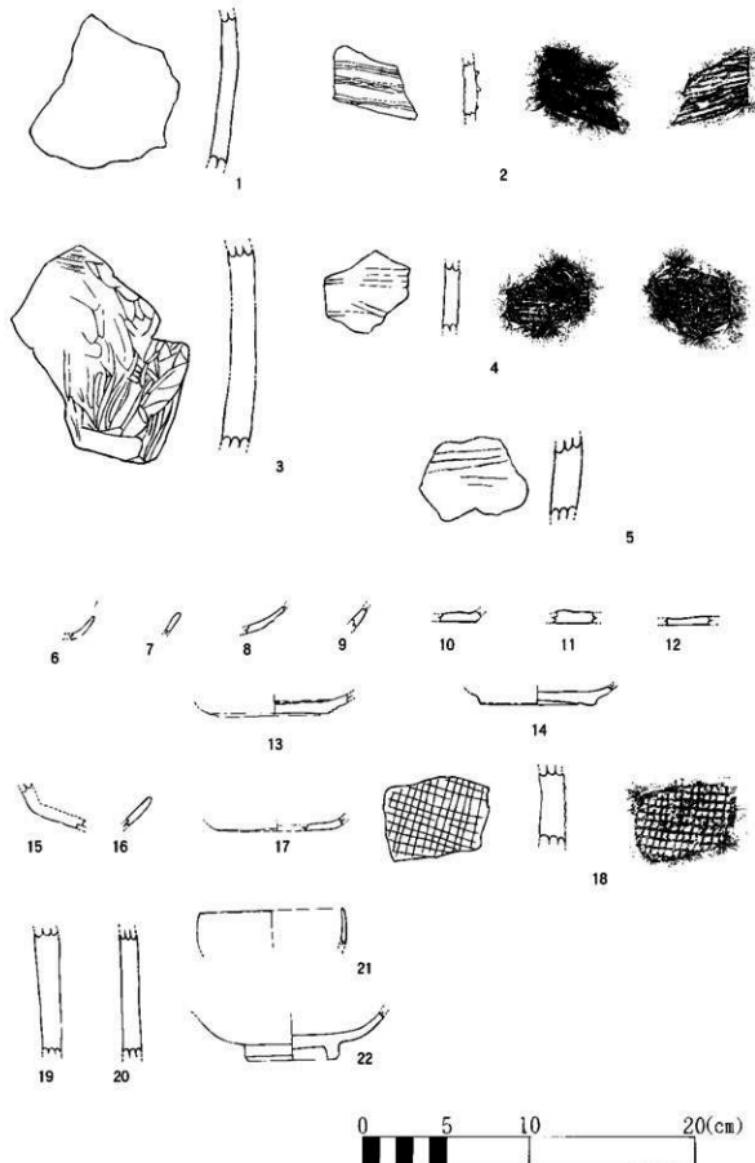
9は石核の上面打面を剥離した剥片を用いて石鎌の脚部を形成する。

12は弥生時代の石斧である。

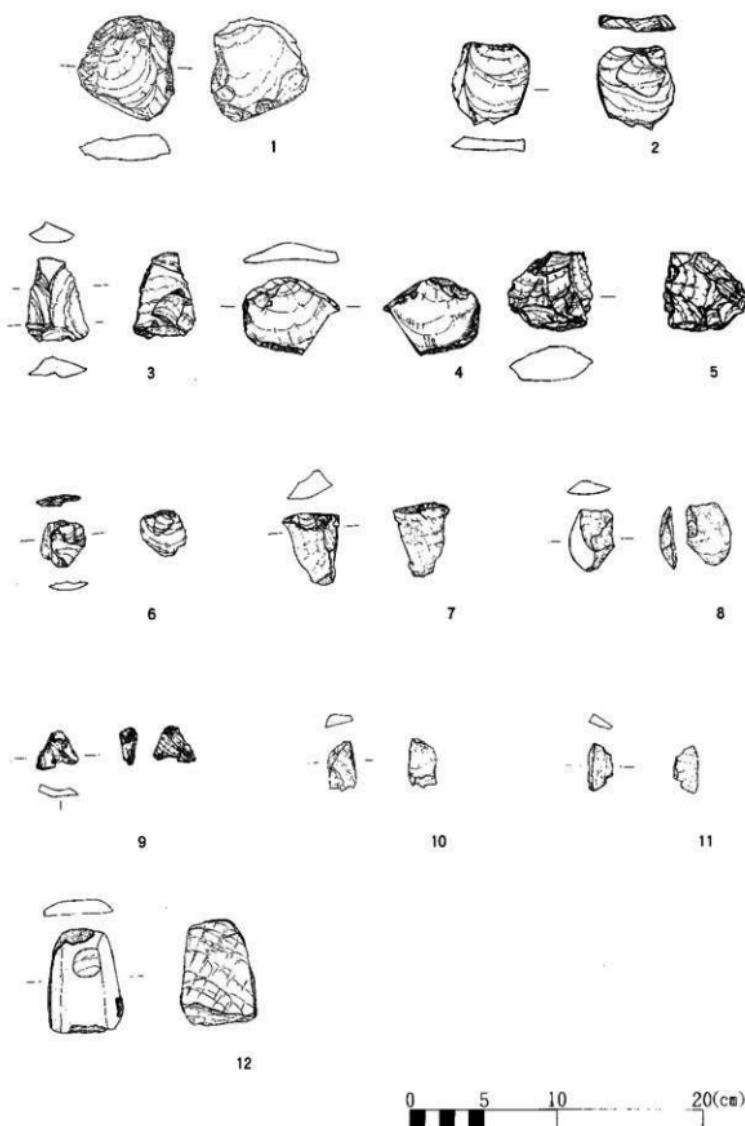
薄型の打製石斧で裏面に製作の剥離工程が行われている。基部は使用中に破損しており全表面は風化が進んでいる。

第7図 内城第1遺跡遺物分布図





第8図 内城第1遺跡出土遺物実測図(1)



第9図 内城第1遺跡出土遺物実測図（2）

内城第1遺跡

報告書番号	種別	器種・部位	出土地点	成形・調整・文様など			色調		胎土の特徴	備考		
				外面	内面	口縁	底部	外面	内面			
1	縄文土器	壺 胴部	1-15	楕円化・傾め方角 の工具痕あり	楕円上に横 切子、工具 による痕跡 あり			に赤い黄緑 (GYK 6/4)	に赤い黄緑 (GYR 6/4)	微細～3mm大の世界を作む。1mm ～2mm大で半透明、窓透の岩石を 含む。		
2	縄文土器	深鉢 胴部	1-30	楕円 方向ナデ、點 突法で底板 形成あり	楕円方向 ナデの痕 跡あり			赤褐色 (GYR 5/2)	に赤い黄緑 (GYR 5/2)	1mm大で無色透明、光沢のある 純白を含む。微細～2mm大で灰白色 色、薄赤褐色の岩片を含む。		
3	弥生土器	壺 胴部	1-17	楕円化 方向ナデ、 点突法で底 板形成あり	楕円化方 向ナデ、 楕円化され る跡			浅灰褐 (GYR 6/4)	灰口 (GYR 6/2)	1mm大で灰白色、微細の岩片を含む。 1mm～2mm大で無色透明、薄 色で光沢のある底通透の軽物質を含む。		
4	弥生土器	鉢 胴部	1-10	楕円 方向ナデ の痕跡あり	楕円と同 じ			浅灰褐 (GYR 6/4)	に赤い黄緑 (GYR 7/4)	1mm大で灰白色の沿辺を作む。薄 解して無色透明で光沢のある底通透の軽物質を含む。		
5	弥生土器	壺 胴部	1-17	楕円化方 向ナデの 痕跡あり	楕円化方 向ナデ			浅灰褐 (GYR 6/4)	灰白 (GYR 8/2)	1mm～2mm大で灰白色・薄色の 岩片を作む。1mm～1.5mm大で半 透明の軽物質を含む。		
6	土師質 土器	皿 口縁～底部	1-4	楕円 方向ナデ、 点突法で底 板形成あり	楕円方向ナ デ			褐 (GYR 7/6)	褐 (GYR 7/6)	1mm大の褐色の岩片を含む。	かわらけ	
7	土師質 土器	皿 口縁部	1-6	ナデ	ナデ	ナデ		褐 (GYR 7/6)	褐 (GYR 7/6)	微細～1mm大で褐色の岩片を含む。	かわらけ	
8	土師質 土器	壺 胴部 (底付)	1-31	工具によ る楕円化 ナデ、楕 円化	楕円化ナ デ			に赤い黄緑 (GYR 6/4)	赤褐色 (GYR 5/2)	微細～1mm大で褐色の岩片を含む。 微細で無色透明で光沢のある軽物質を含む。	かわらけ	
9	土師質 土器	皿 胴部	1-25	工具によ る楕円化 ナデ	工具によ る楕円化 ナデ			褐 (GYR 7/6)	赤褐色 (GYR 8/4)	微細で灰白色の砂粒を含む。	かわらけ	
10	土師質 土器	皿 底部	1-29	ヘラ切り	ナデ			に赤い黄 (GYR 7/4)	に赤い黄 (GYM 7/4)	1mm大で褐色の岩片を含む。褐色 で黒色の砂粒を含む。	かわらけ	
11	土師質 土器	皿 底部	1-25	厚底	厚底			に赤い黄 (GYR 7/2)	に赤い黄 (GYR 7/2)	微細で灰白色の砂粒を含む。	かわらけ	
12	土師質 土器	皿 底部	1-31	ナデ	厚底			に赤い黄 (GYR 7/4)	に赤い黄 (GYR 7/4)	微細～1mm大で褐色の岩片を含む。	かわらけ	
13	土師質 土器	皿 底部	1-23	ヘラ切り	ヘラ切り			ヘラ切り、 楕円化 ナデ	に赤い黄 (GYR 7/4)	に赤い黄 (GYR 7/4)	微細で黒色の砂粒を含む。微細で解 透透明で光沢のある軽物質を含む。	かわらけ
14	土師質 土器	壺 底部	1-24	ナデ、ヘ ラ切り	楕円化			ヘラ 切り 約7.0cm	褐 (GYR 7/6)	褐 (GYR 7/6)	1mm～1.5mm大で褐色・灰白色の 岩片を含む。微細で灰白色の砂粒を含む。	
15	土師質 土器	甕 底部	1-10	楕円化	ナデ			褐 (GYR 6/8)	褐 (GYR 6/8)	1mm大の灰白色の岩片を含む。 2mm大の褐色の岩片を含む。		
16	土師質 土器	壺 底部	1-9	ナデ	楕円化ナ デ	ナデ		に赤い黄 (GYR 7/4)	に赤い黄 (GYR 7/4)	1mm大で褐色の岩片を少許含む。		
17	土師質 土器	皿 底部	1-8	楕円化方 向の工具痕 あり	楕円化ナ デ			ヘラ切り、 楕円化ナ デ、楕円化 ナデ	に赤い黄 (GYR 5/2)	褐 (GYR 7/6)	1mm大で褐色の岩片を含む。	
18	須恵器	甕 胴部	1-7	楕円化の 工具痕、 底付あり	楕円化 ナデ	楕円化 ナデ		褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	微細で無色透明で光沢のある軽物質を含 む。(底付は褐色の砂粒を含む。) 1mm～3mm大で褐色の岩片を含む。5mm大で 褐色の砂粒を含む。5mm大で褐色。		
19	陶器	甕 胴部	1-19	楕円化ナ デ	楕円化ナ デ			赤褐 (GYR 5/4)	赤褐 (GYR 5/4)	微細～9mm大で灰白色・淡青色・ 灰岩の岩片を含む。(底付は褐色の砂 粒が交互に系合している。)		
20	陶器	甕 胴部	1-1	楕円化方 向の工具痕 あり	楕円化方 向ナデ			灰赤 (GYR 5/4)	に赤い黄 (GYR 6/7)	1mm～4mm大で青白・白色・灰 色・淡青色の岩片を含む。1cm大で 灰白色の岩片を含む。		
21	陶器	壺 口縁部	1-11	輪廓が かかってい る	輪廓が かかってい る			灰白 (GY 8/2)	灰白 (GY 8/2)	微細で黒色の砂粒を含む。		
22	陶器	壺 底部	1-32	輪 廓が かかってい る	輪廓が かかってい る			輪廓 かかって いる 約7	灰白 (GY 7/1)	微細で灰白色の砂粒を含む。		

第1表 内城第1遺跡出土遺物観察表(1)

報告書 番号	器 種	出土地点	計 澄 値			重量(g)	石 材	備 考
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
1	石核剥片	1-3	7.25	6.65	1.75	111	流紋岩	二次加工剥片
2	石核剥片	1-21	5.75	5.25	0.9	35	流紋岩	
3	尖頭状石器	1-2	5.71	4.22	1.45	30	流紋岩	
4	石核剥片	1-14	5.32	6.6	1.4	40	流紋岩	二次加工剥片
5	円形器	1-16	5.30	5.65	2.35	77	砂岩	
6	剥片	1-22	2.12	3.06	0.68	5	流紋岩	
7	尖頭状石器	1-12	5.01	3.85	1.75	22	流紋岩	
8	石核剥片	1-5	4.18	3.05	0.98	14	砂岩	
9	石礫	1-13	2.51	2.85	1.02	5	黒耀石	
10	剥片	28-55	3.38	1.95	0.86	5	流紋岩	
11	剥片	1-20	3.35	1.7	0.95	8	安山岩	二次加工剥片
12	石斧	1-13	7.2	5.2	1.2	65	砂岩	使用による破損

第2表 内城第1遺跡出土遺物観察表(2)

第3章 まとめ

今回の内城第1遺跡の調査では、遺構は主に5層の生活基盤層から柱穴29・性格不明土坑11・集石遺構2・溝状遺構1の計43遺構が検出され、遺物は、縄文上器2・弥生土器3・十師質土器12・須恵器1・陶器4・剥片7・尖頭状石器2・円形搔器1・石鎌1・石斧1の計34点が出上した。

遺構・遺物が検出された調査地は、内城の縄張りにおいて主郭曲輪Iの東側先端（調査面積：572.84m²）に位置する。主郭曲輪I（最大東西約220m、南北130m）は、南側尾根に沿って平坦地には曲輪を設け、必要に応じてルートを堀で断ち切っていく中で深く入り込んだ開析谷や裾部を流れる川を取り込んで北側の最終ラインに到達する箇所にある。主郭曲輪Iの両側には、曲輪のⅢ・Ⅳが構えておりその間に掘切が設けられ北側斜面は急崖と川による堅固な縄張りとなっている。

このように調査地は、内城の防壁上、最も重要な主郭曲輪Iの東側先端部に位置している。さらに調査地より東側へ行くと曲輪IVとの間に掘切がある。

主郭曲輪Iの調査地の機能は、出土遺構の柱穴からは、掘立柱による簡易な建物が立ち並んでいたと想定できる。また溝状遺構や集石遺構は、建物間の区画として用いていたと考えられる。

調査地が使用された時期は、今回の発掘調査により出土した十師質土器・陶器・須恵器、及び宮崎県埋蔵文化財センターが同時期に平行して実施した内城全体の分布調査と一部の発掘調査で出土した銭貨（北宋期の10世紀後半～11世紀代の出土銭貨が半数以上）等を総合して10世紀代から13世紀代に営まれた中世期の山城と推測できる。

調査地周辺で縄文時代から弥生時代にかけての遺物が確認されたが、これらは、アカホヤが2次堆積した中から検出されたもので城郭に直接かかわる資料ではない。

総じて、今回の発掘調査により佐原町内の中世期の山城の一端を伺い知る貴重な資料を得ることができた。

報告書抄録

ふりがな	うちしろだい1いせき
書名	内城第1遺跡
シリーズ名	佐土原町文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	佐土原町教育委員会
所在地	〒880-0297 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島20660番地
発行年月日	2001年(平成13年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	うちしろだい1いせき 内城第1遺跡
ふりがな 所在地	さどわらちょうおおあざひがしかみなかあざうちしろ 佐土原町大字東上那珂字内城
遺跡番号	5004
調査期間	平成11年4月16日～5月31日
調査面積	572.84m ²
調査原因	携帯電話無線基地局建設

佐土原町文化財調査報告書
第19集

内城第1遺跡

平成13年3月

発行 宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会
印刷 (有)宮崎新生社印刷